

ルネサスが
SANYOに
選ばれた理由。

協力:  Microsoft Office

広告 [特集]世界をリードする心臓・血管医療 提供 東芝

広告 7月21日(金)SAPビジネス・シンポジウム'06 ジェフリー・ムーア来日講演決定

広告 講演内容がWebで!! 『内部統制とITフォーラム』ITの果たす役割とは? NIKKEI

広告 ◆オープン化粧品◆業務システム連携で在庫と物流コストが約30%減-富士通

ビジネス:ネット時評(日経デジタルコアより)

更新:1月10日 07:00

<今年の展望(4)>今年のITを想う(中村 伊知哉)

西表島と由布島の間は400メートル。浅瀬を水牛の引く車で渡る。一步ずつ、左右に揺られながら、進む。水牛を導く老女のつまびく三味線がしみじみと耳を洗う。東京から2000キロ以上はなれて、さて2002年はどうしたものかと静かに想う。ここなら東京もボストンも追いかけては来ない。



それは甘かった。こんな牛車にも電波は届き、ケータイがガンガンつながる。仕事が追いかけてくる。もう逃げ場はない。電波が届かないことを言い訳にはできなくなった。かつて電波不感地帯をなくすための公共投資の仕事をしていたことがあるが、いま必要なのはむしろ、電波の届かない情報空白地帯を造ることかもしれない。

■IT「で」どうするか

「いながらにして」用が足せる。というのはネットのホントのパワーではない。効用を正確に示すなら、「どこにいてもいい」権利を獲得することだ。だから動き回ってそこらじゅうにいることにしている。しかし「逃げる」ことが無理になった以上、情報社会でのヘゲモニーを勝ち取るには、自分で電源をオフにするしかない。今年こそ、ケータイをオフにするパワーと根性を身につけたい。

2002年は次世代ケータイの年だろうか。無線LANの年だろうか。沖縄一帯を特別区にして、免許不要の周波数帯を広く設定した実験をしてみたい。あるいはFTTH(家庭への光ファイバー敷設)「の年になるのだろうか。デジタル放送やユビキタスの年も来るのだろうか。

昨年はブロードバンドの年で、その前はネットバブルの年で、その前はeコマースだ。同じように今年もデジタルの年で、来年もその次も、しばらく毎年なんらかのデジタルの年になる。どうにもせわしないことである。

仲間川を小舟で上り、マングローブの生い茂る森を分け入ると、サキシマスオウの木にたどり着く。樹齢400年の巨木だ。この4世紀、彼は何を見てきたのだろうか。400年前。ゲーテンベルクの印刷技術の効果が現れ、宗教革命を経て清教徒がイギリスからアメリカに渡ろうとしていた。日本にも鉄砲やキリスト教がやってきて、関ヶ原で天下が分かれた。文字や書物の大衆化は、4世紀ほどの間に、宗教革命のみならず、近代国家や資本主義や科学技術を生んでいった。

ゲーテンベルク以後ずっと大事だったのは、印刷する中身と、それがもたらす社会変化であって、印刷の技術や道具ではない。デジタルの革命がこれから3世紀や4世紀のうちに何をもたらすのか。いまそれをやみくもに空想する大チャンスなのだが、まだわれわれの多くは道具のことばかり気にしている。インフラやコンピュータの姿はもう見えた。そういう道具を使って何を描くのか、何を生むのかに頭をめぐらせたい。IT「を」どうするか、よりも、IT「で」どうするか。

■まずは「自分にできることを精一杯」

夜になればイリオモテヤマネコが横切る道。そこにこの島ただ一つの信号機がある。実は信号機など不要なのだが、こどもにルールを教育するためつけてみたのだという。なるほど。文明なんてムリに入れなくてもいい。それよりも、世の中には色んな文化や価値観があることを認識するようにしたい。

戦争やテロがなお続く。その終結にITが役立てば素敵なことだ。しかし、つながる程度で争いが絶えることはない。つながることで争いが始まることさえある。むろんネットはさまざまな考えを交換し、共有し、新しい考えを創造していくためのものだ。でも、たとえ電波が地球上をおおったとしても、人々のアイデンティティにまで染み渡っていくには、まだずいぶん時間を要する。

だから今は自分にできることを精一杯やろうと思う。私は、MITを軸にこどものセンターを創っていくこと、音楽とブロードバンドのビジネスモデルを探ること、日本のIT政策を再デザインすること、の3つの分野に携わっている。産学官の領域をフラフラと行き来している。

このようなフワフワした仕事は、ネットのコミュニティを作ったり活用したりすることによってのみ遂行できる。しかしいずれもどうにも中途半端だ。自身まだネットの威力を発揮し得ていない。これはネットの技術や道具のデキのせいではなくて、自分のせいなのだ。

細い道をクルマで進む。サトウキビ畑を経て、パイナップル畑を抜けると、星の砂に満ちた浜に出る。自分の足で、一歩ずつ踏みしめて歩く。

-筆者紹介-

中村 伊知哉(なかむら いちや)
スタンフォード日本センター研究所長



略歴

1961年生まれ、京都市出身。京都大学経済学部卒。在学中はロックバンド“少年ナイフ”のディレクターなどを務める。84年郵政省入省。電気通信局、放送行政局、登別郵便局長を経て、通信政策局でマルチメディア政策、インターネット政策を推進。93年からパリに駐在し、95年に帰国後は官房総務課で規制緩和、省庁再編に従事。98年郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問に就くとともに渡米、MITメディアラボ客員教授に就任。2002年9月から現職を兼務。経済産業研究所コンサルティングフェロー、(社)音楽制作者連盟顧問、NPO「CANVAS」副理事長を兼務。著書に『インターネット,自由を我等に』(アスキー出版局)、『デジタルのおもちゃ箱』(NTT出版)など。

● 記事一覧

- 労働力不足とロボット社会(築地達郎)
- 通信市場の「ジレンマ」——光ファイバー普及、市場集中を誘発(今川拓郎)
- メディア融合時代における「競争」と「公益」の調和・竹中懇最終報告に寄せて(金正勲)
- IT人材不足を解消するためにすべきことは何か(前川徹)
- 利用者の視点からコンテンツ活性化を考える(大木登志枝)
- 「ネットで働ける」社会は本当に来るのか?(田澤由利)
- 携帯電話の「自己触媒的」発達・グローバル市場で強みとなるか(土屋大洋)